

## 教職員情報

連載第2回

## 京大植物園観察会

## ■第38回 観察会のお知らせ

日時:5月11日(木)12:05~12:55

『植物が作る謎の部屋—ダニ室をのぞいてみよう』

第36回観察レポート 2006年3月30日(木) 12:10~40 曇り時々雪  
 テーマ「北部の春」(きたぐにのはる) ガイド:門川 朋樹(京都大学理学研究科植物系統分類学)

当日は気温も上がりず時折雪が舞い、例年ならば桜が咲く頃とは思えない天候でした。野外、それも水辺で観察会を行うには最悪の環境でしたが、20人余りの方にお集まり頂き、三十有余回を重ねる観察会の定着を印象付けられました。

今回のテーマは「北部(きたぐに)の春」でした。“北部”と書いて“きたぐに”と読ませる辺りは京大を知る方には理解して頂けるのではないのでしょうか。春と申しましても、カタクリに代表されるような雪解けと共に春にだけ咲く可憐な花、スプリングエフェメラル、などとは何の関係もなく、今が丁度適期の殖え過ぎた池のコウホネの、地下茎駆除をお見せしようという泥臭い企画でした。

さて、このコウホネですが、池や水路の底に生える多年草で、スイレンの仲間です。水底の泥中から水面上に出る葉柄に長卵形の葉が付く抽水植物です。5月の半ばから9月にかけて径4~5cmの黄色い花を水面から出します。花は5~6枚の大きな黄色の萼片の内側に、多数のこれまた黄色の花弁と雄蕊が螺旋状に並び中央に複数の心皮が緩く合着した柱頭盤を持つ雌蕊群が見られるものです。花弁の数・形状は異なりますが、ハスよりはスイレンの方に花の構造は似ています。参加者には昨年偶々採取した花の液浸標本を見て頂きました。



コウホネの地下茎駆除▲



▲コウホネの地下茎

さて今回は池底の泥中から採取したコウホネの地下茎を見て頂いたのですが、この地下茎は外表面も内部も白色をしており、また所々に茶色の葉痕が見られることなどから、水の中の骨のようだと“河骨(コウホネ)”と名付けられました。割ってみれば近縁なハスの根(蓮根)と同じように大きな穴(通気組織)がいくつも並んでおり、当然「食べられますか?」と有用性が話題に上りました。コウホネの地下茎を乾かしたものを「川骨」と称して薬用としますが、味の方は筆者は未経験です。食しても害は無いのでしょうか。

この穴(通気組織)は水生の維管束植物(“藻”などではない)によく見られる組織で、水を運ぶ「道管」とは異なる組織です。道管が空洞になった個々の細胞が連なって一本のチューブとなっているのに対し、通気組織は細胞と細胞の間が広がって空気の通り道となったものです。ところがガイドの不慣れさから「道管ですか?」の質問に思わず「はい」と応えてしまい、その後も修正することが出来ないままに話が進んでしまいました。この場を借りて訂正とお詫びを申し上げます。ガイドの中では水の道管と通気の“二セ道管”を区別して話したので、この通気組織の例として同じく池の底に生える端午の節句に用いるショウブとアヤメの仲間のキショウブを紹介しました。

今回は雪の中でまさしく華のない、根と茎と葉と泥だけの観察会でしたが、初夏は池の周りにはスイレン、キショウブなどの花が見られる季節です。皆さんも身近な水辺を覗いてみては如何でしょうか?

## ☆植物リスト

池中:コウホネ (Nuphar japonicum)、ショウブ (Acorus calamus)、キショウブ (Iris pseudacorus)

蕾:フキ

開花:ウメ、ヤマブキ、ユキヤナギ、ユキワリイチゲ、サンシュユ、ツバキ、カンサイタンポポ、ハコベ、スミレ(数種類)、シダレザクラ、ボケ、サラサボケ、ニチニチソウ、ハナニラ、ヒイラギナンテン、キツネノボタン、オオイヌノフグリ、シナレンギョウ、ヒュウガミズキ、トサミズキ、モクレイシ

結実:アオキ、ヤブラン、マンリョウ、トウサイカチ、フジ

京大植物園を考える会 <http://members.at.infoseek.co.jp/bgarden/>  
 京大植物園のブログができましたので覗いてみてください。

京大植物園TODAY ( <http://blog.goo.ne.jp/bgfanclub/> )

「ひとつまえにもどる」

Copyright (C) SCOOP. NET Kyoto-Univ CO-OP. All Rights Reserved..